

Ⅱ  
—  
10  
世界の経済・文化における日本の位置

(議長 本間長世)

飯田経夫

(1)

ここ数年ロンドンへ行く機会がないが、それまではしょっちゅう行っていた。したがって、いまはどうなったか知らないが（たぶん変わっていないのではないだろうか?）、当時感じたことがある。それは、まことに些細なようだが、ロンドンの地下鉄の駅にある切符の自動販売機のことである。

それは不向きな販売機だった。まず、料金がちがえば販売機もちがう。たとえば35ペンス用販売機、50ペンス用販売機、1ポンド用販売機等々と、料金の段階数だけの販売機がずらりと並んでいる。しかも、それぞれの販売機には投入するコインの種類が指定されている。たとえば35ペンス用販売機には、「10ペンス硬貨三枚と5ペンス硬貨一枚」といった具合である。指定とちがうコインを入れると切符は出てこない。以前のことなので記憶が薄れたが、たしかお釣りが出ない販売機が多かった。

これでは不便だから、乗客はあまり自動販売機を使わず、人員が配置されている数少ない窓口で長蛇の列ができてしまう。しかもそれが行くとびごとにならなくて、いつ行っても変わらない。日本の販売機のはうがはるかに便利だし、しかも当時は年々ますます便利になりつつあった（いまは改善の余地がないところまできたから、あまり変わらないようだが・・・）。ともかく、近年の日本とはまったくちがう。

このちがいを、はたして日本人はどのように受け取るだろうか。最近の日本人のなかには、「やはり日本のほうが進んでいる。イギリスは駄目だ」と感じる傲慢な人が増えているのだろうか。それとは逆に、「切符を買うことなどにコセコセしないイギリス人は、やはり大人物だ。それとくらべて、効率一点張りの日本人はまだ駄目だ」というたぐいのことをいいたいが、へそまがりな人は、いったいどのくらいいるのだろうか。ただし私自身はそのどちらでもなく、「いったいいつから、イギリス人はこのように変化してしまったのだろうか」という疑問が、心に浮かぶ。

というのは、イギリス人が昔からこうだったとは、とうてい考えられないからである。何しろイギリス人は、十八世紀後半に世界で最初に産業革命をやり遂げた国民にはかならない。それまで人類がまったく知らなかった近代工業文明（アルビン・トフラー流に言えば「第二の波」）をはじめて創り出した国民が、猛烈な新しいものの好きでなかったはずがない。そして、それほどの新しいものの好きが、古びた自動販売機に辛抱できるはずがないだろう。そのころのイギリス人は、近年の日本人とまったく違ったにちがいない。

それから約百年後の十九世紀後半にも、やはりそうだった。明治維新の直後に、日本政府は岩倉具視を団長とする大使節団を欧米に派遣したことがある。そして、その使節団のロンドン見聞記のなかには、ロンドン市内を流れるテームズ川には何本

もの立派な橋がかかっているが、そのほとんどが最近何年かのあいだに完成したものだということが、感嘆を込めて記されている。かつてそのくだりを読んだとき、高度成長期の日本で本州・四国架橋が話題になった際、たちまち三地点が名乗りをあげて猛烈な競争を演じ、一挙に三本の橋がかかってしまいかねない勢いだったことを思い出して、私は大笑いした。やはり、そっくりなのである。

それほど新しいものの好きだったイギリス人が、いつのころからか新しいものの好きでなくなり、いまのようになった。いったいその変化がいつ起こり、それが何をきっかけとする変化だったのかということは、大変興味深く重要な問題である。ところが歴史の本には、そのことはまったく書いてない。著者自身に問題意識がなければ、そういう問題が取り扱われるはずはないのだろう。

(2)

近年、アメリカ人はモノづくりにとみに関心を失い、たとえばアメリカの自動車メーカーがアメリカ国内の工場で生産した車は、トラブルが多いことで悪名が高い。さかんに中南米へ工場進出しているのは、そのほうが人件費が安いことはいわれなくともわかるが、そのほうが製品の品質がよいためでもあると聞いて、にわかには信じられなかったことがある。他方、日本のメーカーは丹念なモノづくりでは定評があり、それが日本の

経済力の基盤となっている。

しかも、その丹念なモノづくりがいまではアメリカにも移植されつつある。輸出摩擦を契機に、日本の主な自動車メーカーはアメリカへ工場進出して現地生産を始めたが、それが概して好調でアメリカのメーカーを急速に追い上げつつあるため、いまでは投資摩擦の発生が懸念されるほどである。

しかし、イギリス人の新しいものの嫌いがもとそうではなかったのと同様に、アメリカ人もまた、モノづくりに対する関心がもともと弱かったわけではけつてない。ヘンリー・フォード（一世）の伝記のなかでよく知られたエピソードによると、若いころの彼は、自社の製品を一台ずつ自宅まで試運転して、品質の維持に心がけたといわれる。もしそうだとすると、それはまさに近年の日本人とそっくりではないだろうか。ところが、かつてのアメリカにはたしかにあったモノづくりに賭けるこの職人根性が、いつのころからか、何かをきっかけになくなってしまったのである。

何年前か、アメリカ駐在が長い日本の一経営者氏と、テネシー州の平原を長時間ドライブしたことがある。話がたまたまアメリカにおけるモノづくり精神の衰退に及んだとき、私が「それにしても、いったいいつからそうなってしまったのでしょうか」と質問したところ、とっさの答えは「もともとそうだったのではないですか」ということだった。そこで私は、まずヘンリー・フォードのエピソードに触れ、さらにかつてのアメリカ人にバ

イブルのように愛読されたベンジャミン・フランクリンの『自伝』に触れて、そこで強調されている勤儉貯蓄の精神に言及した。

そうすると氏は「いわれてみれば、たしかにそのとおりですね」といった後、しばらく間を置いてから「やはりベトナム戦争が悪かったのでしょうか」と自信なげにつぶやいた。近年のアメリカ人は、何かまずいことがあると、必ずその責任をベトナム戦争に転嫁する癖があり、氏もそれに倣ったらしい。もっとも、氏がそれに倣ったからといって、私は氏を批判するつもりはいっさいない。なぜなら、私の知るかぎり（もっとも、私を知っている範囲は決して広いとはいえないが）、この点を解明した文献は見当たらないからである。ここでも、論者に問題意識そのものがなかったにちがいない。

ついでにいうと、後日私は、日本を代表するある航空機メーカーの工場でも、「もともとそうだったのではないですか」というまったく同じ答えに出会ったことがある。それは、アメリカのメーカーが航空機の組立・整備ラインに問題を抱え、その解決のために日本メーカーを大に見習っているという話題に関連してであった。

### (3)

以上で見たイギリスとアメリカの例が私たちに教えてくれるのは、国際比較とくに「文化」の国際比較のむずかしさだろう。

たしかにいまの時点で比較すれば、日本人はイギリス人よりも新しいものの好きだし、アメリカ人よりもモノづくりに熱心である。そして、もし人びとが新しいものの好きならば、そういう人びとが寄り集まってつくる社会には、ただ技術革新への抵抗が弱いだけでなく、さらに一歩進んで、新しいものはむしろ積極的に取り入れて行こうという進取気性が横溢する。しかもそれに加えて、もし人びとがモノづくりに熱心だとすると、製品とくに新製品を高品質・低コストで生産する技術を身につけるスピードは速い。

このように、いまの日本がいまのイギリス（および、おそらくはいまのアメリカ）よりも新しいものの好きで、いまのアメリカ（および、おそらくはいまのイギリス）よりもモノづくりに熱心なことは、たしかにいまの日本経済の勢いを、いまのイギリス経済やアメリカ経済のそれよりもはるかに目ざましいものにする。その概略を時の流れのなかでたとると、おおよそ次のようになるだろう。

十九世紀を象徴した「ブリティッシュ・ウエイ・オブ・ライフ」に交代して二十世紀を象徴するのは、「アメリカン・ウエイ・オブ・ライフ」である。自動車と一連の家電製品とを中心とするこのライフスタイルは、二十世紀前半にアメリカ人によって創りだされたが、その後全世界に普及した。いまでは世界中どこへ行っても、人びとが営む生活のうちもっとも華やかな部分は、すべてアメリカ人の真似だといっている。その意味でア



アメリカは世界を制覇したのであり、二十世紀はまさに「アメリカの世紀」である。そして、このライフスタイルを創りつづけた二十世紀前半のアメリカ人が、モノづくりにきわめて熱心だったことは疑問の余地がないだろう。

ところがいつのころからか、アメリカはモノづくりへの関心を失った。モノづくりに熱心な日本が、そういうアメリカをしきりに追いつけた結果起こったのが、一連の貿易摩擦にほかならない。なかでも象徴的なのは、テレビなどの家電製品をめぐる摩擦と自動車摩擦とだろう。というのは、家電製品と自動車とはまさにアメリカ文明の象徴であり、いわばアメリカの「本丸」だからである。日本によって「本丸」を脅かされたことが、アメリカにとって大きなショックでなかったはずがない。

しかも日本の勢いは、ただそれだけにはとどまらなかった。新しいものの好きの日本人は、ハイテク・先端技術とくにマイクロエレクトロニクスに着々と力を蓄え、ことに生産技術（「モノづくり」）面での優位にはいまや驚くべきものがある。家電と自動車とは、たしかに「本丸」とはいつても現在のそれであり、現在はいずれ過去となるだろう。ところが、ハイテクをめぐる先進諸国間の角逐は未来にかかわり、いわば「二十一世紀型」の新しいライフスタイルをめぐる先陣争いにほかならない。そこに無視できない勢いを発揮していることが、よきにつけても悪しきにつけても、いまの国際社会で日本経済をきわめて目立つ存在にしている。

(4)

しかしそれでは、はたして日本人はもともと新しいものの好きで、もともとモノづくりに熱心なのだろうか。この問いに対する答えは、まず第一に、(1) 日本人だけがそうだとはいえないということだろう。なぜなら、百年ないし二百年前のイギリス人は、少なくともいまの日本人なりに新しいもの好きだったし、五十年前のアメリカ人は、少なくともいまの日本人なりにモノづくりに熱心だったからである。そして第二に、(2) 日本人が今後いつまでもそうでありつづける保証はないということだろう。なぜなら、百年ないし二百年前にはあれほど新しいもの好きだったイギリス人は、いまやそうではないし、五十年前にはあれほどモノづくりに熱心だったアメリカ人も、いまやそうではないからである。

「もともと」というのは、昔からそうで、今後ともそうだということであり、それがいわば国民性だということだろう。ところが(1)(2)の答えからすると、新しいもの好きでモノづくりに熱心なのが日本人の国民性だなどということは、とてもいえない。さらに、昔を振り返ってみると、二百年前の日本人は鎖国体制下にあり、新しいもの好きどころの話ではなかったし、五十年前の日本人は「安かろう悪かろう」の粗悪品しか作れなかった。

一般に、日本経済の繁栄は日本人の国民性が優秀かつ勤勉なためだというたぐいの議論は、このように考えると論外だろう。

繁榮の渦中にあるため、とかく傲慢に陥りがちなだけに、よりきびしく自戒したほうがいい。私の見方によると、いまの日本経済が繁榮のなかで当たるべから勢いを發揮しているのは、たまたまそういう段階にさしかかっているというだけのことではないだろうか。百年ないし二百年前のイギリス経済や五十年前のアメリカ経済は、ちょうどいまの日本経済と非常によく似た段階にあったのではないだろうか。

そういう絶頂期にあるときには、すべての齒車が不思議なほどうまく噛み合う。諸外国の人びとくらべて日本人が、とくに新しいものの好きでモノづくりに熱心なように見えるのも、とくに優秀で勤勉な印象を与えるのも、ともにそのためだろう。しかし、たまたまの繁榮には必ず終わりがあつた。イギリスやアメリカの前例に照らしても、そのことだけは絶対に疑問の余地がない。ただ、いったいその終わりがいつ到来するかを前もって予測することは、けつして容易ではない。

それはともかく、以上の議論を踏まえて、ここで国際比較といふことを考えてみよう。日本人は「日本人論」を異常に好むといわれるように、たしかに私たち日本人は、「××人はこうだが、日本人はこうだ」というたぐいの話題が好きである。しかもその場合、諸外国人とくらべて日本人が——しかも日本人だけが、とくに変わつていふと考えることが好きである。そういう話を聞いていると、日本人はまるでパンダかコアラのような珍獣の一種に思えてくるが、まさかそんなことはあるまい。

この種の話を含めて一般に「日本人論」または「比較文化論」のなかには、かなりいい加減な議論が混じつてゐることはほぼ確実だろう。

前述のとおり、いまの日本人が新しいものの好きに見えるのは、いまのイギリス人とくらべるからであり、もし百年（二百年）前のイギリス人とくらべれば、日本人がとくに新しいものの好きだなどといふことは、たちまちいえなくなつてしまふ。さらに、たしかにいまの日本人は新しいものの好きだが、それが今後ともそのままずっと変わらないかといへば、その保証はまったくないだろう。ふつう日本人の「国民性」といわれるものや、日本および日本人の「特殊性」といわれるもののなかには、似たようなケースがずいぶん多いのではないだろうか。

もちろん他方、それかといつて日本および日本人に「国民性」「特殊性」がないわけではない。日本人だけがとくに変わつていふという「珍獣」論は論外だが、各国にそれぞれ独自の「国民性」「特殊性」があるように、日本にもそれはあるにちがいない。つまり、各国人がそれぞれ変わつてゐるのと同じ意味で、日本人もまた変わつてゐるにちがいない。しかし以上の議論からいえるのは、そういう「国民性」「特殊性」は、ふつう私たちが漠然と考えているよりもかなり少ないのではないかということである。

もっとも、いまここでそういう断定をくだすのは、いささか輕率かもしれない。なぜなら、各国の「文化」の多様性を反映

して、じつはずいぶん多くの「国民性」「特殊性」があるかもしれないからである。ただし、その多くを私たちはまだ発見していない。そして、それらを発見するためには、これまでのようなアド・ホックなやり方ではだめである。なぜなら、そういうやり方では、真の「国民性」「特殊性」ではない見せかけのそれが、容易に紛れ込んでしまうからである。しかし、それではどんなやり方がいいかということは、私の能力をはるかに超える。

(5)

いまは亡きユニークなエコノミスト下村治氏は、第二次大戦後の日本経済の高度成長を説明するために、「勃興期」という言葉をひところしきりに使ったことがある。かねてから私は、同じ「勃興期」というコンセプトを、下村氏とはやや別のニュアンスで使いたいと考えている。

多くの国々には、その歴史上のある時点で、いわば突如として「勃興期」を迎え、驚くべき成長・発展をスタートさせる。この驚くべき成長・発展はしばらくはつづくが、けっして永遠にはつづかず、やがて必ず終わる。たまたま「勃興期」にある国のパフォーマンスは、同時代の他の国々から見ても、その国自身があとで振り返ってみても、さまざまな「驚異」に満ちている。いわば、「いったいなぜあんなことができる（または、できた）のか」というわけである。

「驚異」の一例は、一九八五年九月の「プラザ合意」後、にわかに訪れた急激きわまるドル安・円高を、日本の企業がみごと乗り切ってしまったことだろう。わずか二年あまりのあいだに、円がドルに対してじつに二倍にも切り上がりながら、日本の産業がみごとに「空洞化」を免れたという事実が、いままお私にはとうてい信じられない。日本のエコノミストである私が信じられないことを、外国人が信じられるはずがないにちがいない。

世界経済は各国間の「陣取り競争」の場であり、「勃興期」にある日本はそこで驚くべき好成績を挙げてきた。日本が好成績だったということは、多くの国々にが日本に陣地を食われたことを意味し、しかもその食われ方が尋常なものではなかったことを意味する。それらの国々にが日本をこころよく思わないのは、当然だろう。はじめ彼らは日本の好成績が、日本がゲームのルールにひどく違反して、さまざまな「汚ない手」を駆使しているためではないかと疑った。

ところが調べてみると、たしかに細かなルール違反はいくつかあるが、とくに大きなそれはない。たしかにルール違反は、たとえ細かなそれでも、けっしてほめられたことではないだろう。しかしその反面、現実が近代経済学の教科書とはちがう以上、ルール違反を犯していない国は世界中どこにもないというのまた、率直にいつて紛れもない事実である。そして、日本が犯しているいくつかの細かなルール違反だけでは、日本経済

の好成績がとうてい説明し切れないことは、いまではほぼ明らかになったのではないかと考えられる。

しかしそのことは、必ずしも諸外国の苛立ちをやわらげるものではない。それどころか逆に、ますますそれを激化させるところがある。たとえば最近話題の「日米構造協議」が、その一例だろう。そこでアメリカが日本に対して要求しているのは、「日本はルール違反を改めろ」ということでは必ずしもない。それよりもむしろ、経済的・社会的な諸慣行には日米間にちがいがあることに関連して、アメリカが日本に「日本流をアメリカ流に改めろ」と要求している感じのことのほうが、はるかに多い。

そのもつとも極端な例を挙げると、数年前にアメリカの一政府高官は、「日本の非関税障壁の最たるものは、日本人が日本語を話すことだ」と口を滑らせたことがある。これほど極端なことはさすがに最近のアメリカはいわないが、極端なだけに、それは事柄の本質をきわめてはつきりと露呈させている。そこで非難・批判の対象になっているのは、言語のちがいという「文化差」であり、日本に対して要求している（かに見える）のは、日本人が日本語を話すのを止めてアメリカ語を話すことではないか！

言語はもちろんのこととして、たとえば商慣習にしてもそれは「文化」の一部だから、国によるちがいがあるのは当然で、そこまで非難し批判するのは率直にいうと無理難題というもの

だろう。しかしそういう無理難題に対してさえ、日本はそれなりの対応をしなければならず、しかもそうしたほうがいい。最近一部のナショナリストが主張するようにむやみに「ノーという」のは、日本の取るべき道ではない。それは、交渉事には相手があること、しかもその相手との友好関係の維持が、日本の国益にとって非常に大事なことももちろんあるが、ただそれだけではない。そこにはさらに、次の事情がからむ。

日本人としての身びいきはいっさい捨て、可能なかぎり客観的に判定してさえ、いまの日本は世界でももつともルール違反の少ない国なのではないだろうか。強い異論はあろうが、少なくとも私自身はそう考える。それでもなおかつ日本が陣取り競争に勝ってしまうというのが、じつは日本がいま「勃興期」にあるということの意味にはかならない。いま日本が「勃興期」にあるとすれば、五十年前のアメリカがそうであり、百年前、二百年前のイギリスがそうだった。いまの日本人が、ある面で五十年前のアメリカ人とそっくりで、百年、二百年前のイギリス人ともそっくりなのは、明らかにそのためだと考えられる。

#### (6)

以上からいえるのは、ひとたび「勃興期」に突入すると、「国民性」や「文化」のちがいにかわりなく、どの国の人びともほぼ似たような行動パターンを取ることだろう。そして、似たような行動パターンの結果は、ほぼ似たような帰結を



生む。

まず、人びとがモノづくりに徹するため、多くの業種が強い輸出競争力を発揮するようになる。そして、彼らが新しいもの好きで進取の気象に溢れるため、最新の技術を活かした新しい成長業種では、とくに輸出競争力の強さは拔群となる。そしてその結果、貿易収支は黒字基調となり、そこで稼いだ外貨がさかんに海外へ投資される。もちろん細かい点にはいくつかのちがいはあるとしても、かつてイギリスとアメリカがたどったのと基本的にはまったく同じコースを、日本はいま歩んでいる。そして、イギリスとアメリカにとってそのコースに終わりがあつたからには、日本だけがその例外であるはずはない。

よく日本人はエコノミック・アニマルだといわれる。しかし、もし近年の日本人がエコノミック・アニマルだとしたら、かつてその経済が「勃興期」にあつた時代のイギリス人やアメリカ人もまた、やはりエコノミック・アニマルだったのでないだろうか。そう考えて、私はしばしば心中ひそかに微笑する。しかしそれでは「エコノミック・アニマル」とは、いったいどのようなアニマルなのだろうか。じつはそこには、意外に大きな問題点が潜んでいることを見よう。

いったい「エコノミック・アニマル」とは、どのようなアニマルなのかという問いに対して、多くの（ことによるとほとんどすべての？）人びとは、「そんなことはわかり切っているではないか。カネ儲けにしか関心のない俗物のことだ」と、鼻先

でせせら笑うのではないだろうか。しかし、はたしてほんとうにそうだろうか。私は、それはちがうのではないかと思う。そして、いったいある人がその点をどう考えるかが、彼がほんとうに「経済」というものを理解しているか否かの分かれ目になると思う。口幅つたい言い方だが、世には「経済」を理解しない人がずいぶん多い。

ポイントはふたつある。ひとつは、たしかにエコノミック・アニマルはカネ儲けをするが、それはかなりの程度まで結果にすぎないのではないかということである。少なくともカネ儲けだけが彼の目的ではなく、同時に他の何かをも、彼は目的としているのではないだろうか。もうひとつは、カネ儲けにはいくつかの方法・手段があるが、エコノミック・アニマルはそういうあるものを選び、他は取らないのではないかということである。いいかえれば、カネ儲けのためには手段を選ばずというのは、エコノミック・アニマルの哲学に反するのではないだろうか。

このふたつはたがいに関係があり、結局のところは同じことなのかもしれない。まず第二点に注目すると、手っ取り早くカネ儲けをしようと思えば、たとえば近年流行の「マネーゲーム」すなわち投機で一発当てる方法があり、失敗するとひどい目に遭う（「ハイ・リスク」代わりに、成功の報酬も大きい（「ハイ・リターン」）だろう。しかし、エコノミック・アニマルはそういう方法は取らない。さらに、投下した資本を早く回収しよ



うと思えば、マージンが大きく回転も速い商業のほうが有利だが、エコノミック・アニマルはそういう方法をもあまり好まないところがある。

エコノミック・アニマルが関心を抱くのはモノづくりであり、いわばそれは「商業資本」ではなくて「産業資本」「工業資本」である。モノづくりに資本を投下すると、回転が遅くて回収に時間がかかるうえに、製品一個あたりのマージンはふつうごくわずかだから、一攫千金はめったに望めない。しかし、もし近年の日本人（やかつてのアメリカ人やイギリス人）をエコノミック・アニマルと呼ぶならば、そのアニマルには明らかにこうした愚直なところがある。

このことが、上記・第一点とつながる。投機や商業などをあまり好まず、それらとくらべてはるかに地味なモノづくりに情熱を傾けるところからすると、エコノミック・アニマルの目的がただカネ儲けだけだと見るのは無理だろう。もちろん、カネ儲けができず逆に損をしては元も子もないから、彼がカネ儲けに無関心なはずはないけれども、その反面彼には、ただカネ儲けだけでは満足しないところがある。明らかに彼は、良質な製品をきちんと作りたいということを、もうひとつの目的としている。

しかし、ただ愚直なだけではエコノミック・アニマルはつまらない。世の嗜好はうつろいやすいうえに、企業間競争は激烈をきわめるから、同じモノを同じ方法でつくっているのは彼は

生き残れない。同じモノをつくるにしても、彼はつねに品質の向上とコストの切り下げを心掛けなければならない。さらに、世の嗜好の移り変わりに遅れなく即応しつつ、製品を転換させて新しいモノをつくらなければならない。この点では彼は、新しいものの好きであり、目端が利いて機敏に行動することを必要とする。一見したところ逆説的だが、愚直と機敏との微妙なバランスこそが、エコノミック・アニマルに要求される不可欠の資質だろう。

#### (7)

そこへさらに加わるのが、一般にモノづくりはチームプレーだという事情である。「マネーゲーム」ならば「男一匹」の個人プレーも可能かもしれないが、良質な製品をきちんと作り、絶えずその品質向上とコストダウンを心掛けつつ、しかも時代に即応して製品転換をはかっていくためには、上はトップすなわち社長などの経営陣から、下は「ヒラの人たち」すなわち工場のラインで働くブルーカラー労働者のひとりひとりにいたるまで、全員のチームワークがうまく取れていなければならない。

チームワークとは、全員がおの自分の職分をよくわきまえてその仕事をきちんとこなし、それが企業目的に合致するようににまとめ上げられることである。そのシステムには、関連企業（いわゆる「下請け」）も入るだろう。たとえば自動車やエレクトロニクスのような組み立て型産業の場合だと、何千点さ

らには何万点とある部品のうち、わずかひとつが狂ってもダメなのである。そういうチームワークを築き上げそれを維持していくことは「人の上に立つ人」の責任だが、それは地味だが大変な苦勞を要する仕事である。

そのために必要な条件のひとつは、人びとが仕事を生きがいとし、やる気をもって働くことだろう。そしてこの場合、はたして人間は仕事を生きがいとするか否かという問題は、まず人間を「人の上に立つ人」すなわちエリートと、「ヒラの人たち」すなわち大衆とのふたつに分けたうえで議論しなければならぬ。というのは、いつの時代のどこの国でも、一般に「人の上に立つ人」は仕事を生きがいとするが、「ヒラの人たち」は必ずしもそうとは限らないからである。そして、とくにモノづくりの場合には、「ヒラの人たち」を動員できないかぎりとうてい満足すべき成果は上がらない。

それでも、まだ世が貧しくて「ヒラの人たち」は食うにぎりぎりの賃金しか得られず、しかも経済が不安定なためひとたび不況でクビになれば、それすらも保証されなかった時代には、まだしもやりやすかった。ひとつには、貧しくて無我夢中で働くときには、彼らは心に不平不満を抱くゆとりすらないかもしれない。さらに、かりに不平不満があっても、それを言動に表わして文句をいったりサボったりすれば、「いやなら辞めてくれ」ということになる。ところが、辞めて路頭に迷えば餓死に直結しかねないから、彼らは不平不満を心中深く秘して、まが

りなりにも上役の指示に従うだろう。

いってみればそれは、「失業と飢えの恐怖」で「ヒラの人たち」に脅しをかけ、恐怖感で彼らを働かせることである。それはあまり上等なやり方とはいえないし、それが行きすぎた結果として誕生したのが、マルクス主義に代表される反体制イデオロギーだと見なすことができる。しかし、この「脅し」が効くうちはまだいい。ところがやがて経済は、そういう時代とはくらべものにならないほど豊かになった。さらに経済が安定化して「完全雇用」が当たり前となり、しかもかりに不運にして失業しても、社会保障のおかげで餓死につながる心配はないとなれば、もはや「脅し」は効かない。

いまや「ヒラの人たち」は、不平不満を心おきなく言動に表わして、堂々と文句をいい、かつサボるようになる。というのは、「いやなら辞めてくれ」といわれればさっさと辞めればいいからである。探せば他に仕事はいくらもあるし、急いで仕事を探さなくとも社会保障で食って行く手もある。そこへさらに付け加わるのが、もともと人間性に備わる厄介な側面だろう。「小人閑居して不善をなす」というとおり、豊かになり暮らしにゆとりができるほどかえって不平不満が増えるところが、たしかに人間性にはある。

アメリカを含む多くの国ぐにでモノづくりの意欲が著しく弱化した背景のひとつは、以上のように見てくると、豊かになったために「ヒラの人たち」の勤勞意欲が鈍り、職場の雰囲気

荒廢したことだと見られる。ふつうこのことは、「先進国病」の一症状として議論される。それにしても印象的なのは、「ヒラの人たち」の不平不満の表面化が、マルクス主義のような反体制イデオロギーには向かわず、むしろ「先進国病」を結果したという事実だろう。反体制イデオロギーはしだいに影響力を弱め、ごく最近ついに命を絶った。

もうひとつ印象的で、しかも非常に不思議なのは、以上で見たような「先進国病」の症状が、いまのところ日本にはほとんど観察されないことだろう。日本人がエコノミック・アニマルで、日本経済が「勃興期」にあるということは、じつはそういうことをも意味するのである。

(8)

以上二節で見たところによれば、エコノミック・アニマルという動物は、まず第一に、愚直と機敏との微妙なバランスというたぐい稀な資質を備え、しかも第二に、企業などの組織内で「ヒラの人たち」の反乱を抑え、絶妙なチームワークを維持することができなければならない。もしそうだとするとそれは、ただカネ儲けにしか関心のない完全な俗物というふつうのイメージとは、ずいぶんちがった動物であることがわかる。明らかにそれは、俗物よりかなりましな何物かだろう。しかし現実には、そのことはほとんど理解されていない。

以下、この動物の性格のいくつかを描写してみよう。まずそ

れは、すでに見たとおり著しく機敏でなければならず、新しいモノ好きでなければならない。冒頭で引き合いに出したロンドン地下鉄の切符の自動販売機の例に、もう一度話を戻そう。ごく些細なことのようだが、たぶんそれは次のような重要なことを示唆している。つまり、この販売機のひどさが気にならないような雰囲気の中だけでは、活発な技術革新が起こることはとても期待できないし、逆に技術革新が活発に行なわれつつある雰囲気の中だけでは、こういう非効率な販売機が長く使用されるようなことは、まず起こりえないだろう。

ところが、ひるがえって考えれば、地下鉄の切符がスムーズに買えようが買えまいが、それはたかだか一―二分の差にすぎず、もともとどうでもいいことだろう。もちろん天下国家の一大事や人生の大事件などであろうはずがなく、そういう些細なことに眼の色を変えるたぐいの機敏さもしくは新しいもの好きとは、言葉を変えれば、よほどの軽佻浮薄さ以外の何物でもないかもしれない。そして、そういう軽佻浮薄さは、若さまたはそれに起因する未成熟の表われにはかならないかもしれない。もしそうだとするとそれは、人間と彼らが構成する経済・社会との成熟につれて、急速になくなっていくことが予想される。

次にエコノミック・アニマルは、これもすでに見たとおり、モノづくりへのこだわりという点ですこぶる愚直でなければならない。そして、モノづくりのほかにもっと楽なカネ儲けの方法があるにもかかわらず、それには目もくれず、ひたすらモノ

づくりに専心する愚直さとは、言葉を変えていえばよほどの頑固さにはかならず、それは偏執狂の域に達しているとさえいえるかもしれない。

そして何よりも印象的なのは、エコノミック・アニマルのこの愚直さが、じつは「経済原則」と真っ向から対立し、その意味ではきわめて「非・経済的」な行動だということだろう。ここで「経済的」な行動とは、近代経済学を学ぶ学生がいやというほどたたき込まれるように、可能なあらゆる選択肢を十分に比較検討したうえで、一定のコストを費やして最大の成果を達成するやり方を選ぶこと、もしくは、一定の成果を達成するために最小のコストで済むやり方を選ぶことにほかならない。はじめから選択肢を限定してしまうエコノミック・アニマルの行動パターンは、明らかにこの「経済原則」とは合致しない。

この点からいえば、モノづくりを軽視して著しく「マネーゲーム」化した現代アメリカ経済のほうが、エコノミック・アニマルよりもはるかに「経済原則」に忠実かもしれず、その意味では近年のアメリカ経済は、じつはもっとも資本主義らしい資本主義なのかもしれない。そして、もしそうだとすると、まだその域に達していないエコノミック・アニマルの行動は、ここでもまたたんに未成熟さの反映にすぎないことになる。そして、新しいものの好きと同様に愚直さもまた、人間と経済・社会との成熟とともに、急速に消滅することが予想される。

このように見てくると、結局のところエコノミック・アニマ

ルは過渡期の産物にすぎず、それが短命なものも当然だろう。そして、もしエコノミック・アニマルが短命だとすると、その活躍によって可能となる「勃興期」が短命なものも、当然だということになる。いまのところ日本では、まだエコノミック・アニマルは健在で、「勃興期」の勢いには衰えの兆しはない。しかしこの状態は、いったいあと何年続くことだろうか。

## (9)

エコノミック・アニマルを特色づける軽佻浮薄も愚直も、ともに人間性として美德とはいえないだろう。軽佻浮薄な人間には重みがないし、愚直な人間は面白みに欠ける。愚直が高じて頑固となり偏執狂となれば、ただ面白みに欠けるだけでなく、周囲が不愉快だろう。一般的にいうと、経済が「勃興期」にあり活力に満ちているときには、人間はともすればがさつで「お行儀」が悪い。ところが、やがて「勃興期」が終わり、経済が成熟から衰退へと向かうにつれて、しだいに人間は「お行儀」がよくなる。さらに、性格はソフィスティケートされて陰翳を増し、物事を斜に見るバランス感覚も養われてくる。

明らかにそこには、経済と人間性とのパラドックスがあり、トレード・オフ関係が観察される。そして、とかく人びとくに知識人は、このトレード・オフにおいて人間性の側にくみし、人間をがさつにしその「お行儀」を悪くする経済成長を嫌悪する傾向が強い。しかし私は、一エコノミストとしてあえてこの



傾向に異議を唱え、逆に経済成長の側にくみしたい気持ちが強  
い。というのは、人間が何事かを成し遂げ、それを通して経済・  
社会が大きく変わるのは、何といっても経済成長のプロセスに  
おいてだからである。「勃興期」においては、とくにそうでは  
ないだろうか。

その何よりの証拠は、すでに7節で述べた事柄である。そこ  
での議論の焦点は、経済とくにモノづくりにおいてチームワー  
クが演ずる重要な役割であり、その点に関連して、とくに「ヒ  
ラの人たち」を動員することの重要性和、そのむずかしさで  
あった。その重要性については、いまさら繰り返すまでもない  
だろう。むずかしさについて念のために復習すれば、そのポイ  
ントは、「人の上に立つ人」とはちがって「ヒラの人たち」の  
場合には、仕事が必要しも生きがいとはならないというところ  
にある。

それでも、「ヒラの人たち」が「失業と飢えの恐怖」に直面  
して生きていた貧しい時代には、まだしも楽だった。食ってい  
くの精一杯ならば、心に不平不満を抱くゆとりすらないうえ  
に、かりに不平不満があっても、それを言動に表わせばただち  
に自分自身の不利となるため、彼らはそれを心中深く秘してい  
たからである。しかし、ひとたび豊かになり、「失業と飢えの  
恐怖」という「脅し」が効かなくなると、問題は一挙に表面化  
する。

豊かになりさらに社会保障も整備されると、「ヒラの人たち」

はみずからの不平不満を心おきなく言動に表わすようになる。  
それに加えて、もともと人間性には、豊かになり暮らしにゆと  
りが生じると、不平不満がかえって増えるという厄介な側面が  
ある。そうしたことの結果として、彼らの勤労意欲が鈍り、職  
場の雰囲気著しく荒廃したことが、多くの先進諸国できちん  
としたモノづくりを困難にした。ところがひとり日本では、こ  
の「先進国病」の弊害が驚くほど少ない。以上は事実の認識で  
あり、すでに7節で述べたところでもある。

いうまでもなく問題は、このちがいが生じたのはいったいな  
ぜなのかということである。はじめのうちは、それは「日本の  
経営」のおかげだという見方が有力だった。そしてそこでは、  
終身雇用・年功序列・企業別労働組合などを骨格とする「日本  
的経営」は、「日本の特殊性」の最たるものとされた。したがっ  
てそれは、外国人には理解できず、ましてやとうてい実行でき  
るはずがないことになる。「日本人論」の系譜でいうと、明ら  
かにそれは「珍獣」論に属する。

それはいわば「日本的経営」の「神秘」の絶賛だが、しかし  
それに対しては、やがていくつかの疑問が投げかけられるよう  
になった。たとえば、このように絶賛される前は、逆に「日本  
的経営」は日本の後進性の象徴として酷評されていた。酷評か  
ら絶賛への百八十度の転換は、あまりにご都合主義に過ぎない  
か。

またたとえば、終身雇用・年功序列・企業別労働組合などの



諸慣行は、もしそれらをゆるく定義すれば、類似のものは諸外国にもけっこう存在するし、逆に厳密に定義すれば、当の日本にすらそもそも存在するかどうかが疑わしくなる。さらに、近年の日本ではそれら諸慣行は急速に変容し、原型とはずいぶんちがったものになりつつある。「日本的経営」なるものは、はたしてほんとうに実在するのだろうか。他方、日本企業が海外進出し、世界の各地で生産活動を営むケースが増えるにつれて、いくつかの成功例が報告されるようになった。それらが厳密な意味での「日本的経営」を實行しているか否かはともかく、日本の経営陣の意思がそこに反映されているという広い意味では、明らかにそれらは「日本的経営」だろう。もしそうだとすると、「日本的経営」は必ずしも日本の「神秘」ではないのではあるまいか。

(10)

前節末尾で列挙した疑問を手がかりとしつつ、以下ではひとつの仮説を提示してこの論文の結びに代えよう。ある国の経済が「勃興期」を迎えるのは、けっして偶然だとは考えられない。その経済の「勃興」は、時代が投げかける主要な課題に対して、その国がもっとも適切な回答を見出すことに成功した結果だと考えるのが、もっとも自然だろう。近年の日本経済についても、それはまさにそのとおりなのではないだろうか。

ここで「時代の課題」とは、7節で詳しく述べ、9節で簡単

に復習した事柄にほかならない。貧しい時代には、「失業と飢えの恐怖」という「脅し」をかけて「ヒラの人たち」を服従させ、彼らを働かせることができたが、ひとたび豊かになるともはやこの「脅し」は効かない。その結果生じた「ヒラの人たち」の反乱が、多くの先進諸国で職場を荒廃させ、経済を疲弊させた。もしそうだとすると「時代の課題」とは、たとえ「脅し」がなくとも彼らが反乱を起こすことがないような仕組みを、工夫することである。

「脅し」が効かなくなった途端に、いちはやく彼らを反乱へと立ち向かわせるのは、その心に蓄積された長年の不平不満・恨みつらみである。不平不満・恨みつらみの具体的な中身はさまさまだろうが、それを一言で要約すれば、「格差・差別に由来する疎外感」だろう。所得で見ても、権限で見ても、職場で手にする情報量で見ても、さらにはその他こまごました諸制度・諸慣行（たとえば日給か月給かの別とか、服装とか、食堂や駐車場のあり方等々、等々）で見ても、「人の上に立つ人」と「ヒラの人たち」との格差はきわめて多く、しかも大きい。

ふつう差をつけることは、それで得をする側にとつては無上の喜びである反面、そのために割りを食う側にとっては腹立たしいことこの上ない。そこに発生する疎外感が「ヒラの人たち」を反乱に立ち向かわせるとすると、それを未然に防止するためには、「平等主義」を徹底させて、不必要な格差を極力なくすることがどうしても必要となる。そして、明らかに日本経済の

「勃興」は、徹底した「平等主義」と密接な関連がある。個々の企業内で見ても国全体で見ても、第二次大戦後の日本が徹底した平等社会であることは、ここでとくに証拠を挙げなくとも、いまではよく知られているにちがいない。

「ヒラの人たち」は、かつての日本では必ずしも人間扱いされたとはいえないし、いまなお諸外国の多くではそうである。彼らを含めて全員を大事にし、人間扱いすることを旨とするという意味で、「平等主義」は「人間主義」と呼び変えてもいい。さらに、「ヒラの人たち」が働く生産現場・仕事現場を大事にし、トップもみずからの個室に閉じこもるよりは、むしろしよっちゅう現場に出入りすることを心掛けるという意味では、それは「現場主義」でもある。前節で問題にした「日本の経営」も、終身雇用・年功序列・企業別組合など具体的な制度のタームでとらえるよりも、むしろ「平等主義」「人間主義」「現場主義」などのエートスとして理解したほうがいい。

「脅し」とは言葉を変えれば「しめつけ」であり、「しめつけ」の反対語は「やる気」である。「脅し」「しめつけ」がなくとも反乱を起こさない「ヒラの人たち」は、さらに一步を進めれば、みずから「やる気」をもって働くだろう。「日本の経営」の最良の部分は、明らかにその段階にまで到達している。こうして「日本の経営」は、もはや「脅し」「しめつけ」が効

かない新時代にふさわしいチームワークのつくり方を、全世界に先駆けて開発したのかもしれない。そう見るのは、あるいはほめすぎだろうか。

とはいうものの、日本の「人の上に立つ人」すなわち経営者たちは、あらかじめこの日の到来を期しつつ、グランドデザインにもとづいてこのシステムを構築したわけではけっしてない。彼らはただ、その場その場の短期的な対応を積み重ねてきただけだというのが、ごく正直なところだろう。ただ、そういうアド・ホックな対応の積み重ねのなから結果として出来上がったシステムは、たまたま時代の要求にきわめてよく合ったものだった。それは幸運であり、「勃発興期」の到来にはそういううつきも必要なのかもしれない。

蛇足かもしれないが、最後に一点を指摘しよう。「あるいは日本は、マルクスの理想をもっともよく実現した国なのではないか」ということが、座談のジョークとして時にいわれる。しかし考えてみれば、それは必ずしもジョークではなく、もっと真面目な話なのではないだろうか。そして、もしそうだとするとマルクスは、ソ連・東欧の激動と中国の混乱にもかかわらず、草葉の蔭でけっこう会心の笑みを洩らしているかもしれない。

## コメント ジェフリー・ブロードベント

飯田先生の論文は歴史的な産業国の変化のとりえ方で、日本人論、文化的な解釈よりも歴史の波と勃興期でいろんな国の移り変わりや世界経済体勢での成功を解釈して、非常に参考になってたいへん面白い観点でした。私もその日本の経営の説明に大分賛成の側面が多くて、そんなにコメントはしなくてもいいと思います。むしろ、いまこの論文に書かれたもう一つの側面、それから出てくる結論にもうちょっと取り組んでいこうと思っています。それは、お話では飯田先生はふれられませんでしたけれども、私がちょっと説明した上でコメントさせていただきますかと思っています。

飯田先生の論文は、実はイギリスの地下鉄の販売機の悪さの体験から生まれてきたようです。けれどもイギリスの地下鉄の状態が、販売機を含めて、悪いといえば、ニューヨーク市の地下鉄はもっとひどいもので、ニューヨークに比べたらイギリスはまるで先進国みたいになります。その反面、サンフランシスコのバート地下鉄は、東京のトッポの地下鉄よりもはるかに上にあります。ですから、一概にはある国の状態とか国民性などを説明することは難しいと思います。

先生は、経済開発のやり方を、まず二つの態度の移り変わりとして説明されたんですけれども、新しいものの好き嫌いとか、物づくりの熱意、態度ですね。そして、日本はいまそれを持っている。昔はイギリスは持っていたけれども失った。アメリカも失った。

日本の経営は、アメリカに比べたら確かに違うと思います。非常に当たっている指摘だと思います。そしてアメリカは、そういう日本の経営から、あるいは平等主義からたくさん教訓が得られると思います。アメリカで成功している日本の企業も、その明らかな例だと思います。しかしそこから出てくる結論は、もう一つあります。飯田先生はふれられなかったけれども、日本はいま、自分のハードワーク、一生懸命働いてきたこと、特に企業内の組織によって高度成長して、世界経済

体制で成功したこと、それでもうけている、そういうもうけを受け取る権利があるから、批判されてもその批判は完全に無理だと、この論文ではおっしゃっているらしいです。けれども、これはちょっと疑問に思います。もう一つの側面からとらえようと思います。

こういう態度では、日本の世界経済体制の中の位置づけを充分正しくはとらえられないと思います。たとえば、いまの日本の高度経済成長はいろんな矛盾を生み出している。国内にも国際的にも。そして日本はいま持っている世界観は、世界中の国々の反応を、正しく客観的に把握できる世界観に充分できあがっているかどうか、ちょっと疑問がある。現在の日本のように勃興期にある国は相手国に対して鈍感になっている、あるいは、愚直だから相手の文化を理解すること、一番望ましい状態、あるいは一番敏感な状態であまりないことは飯田先生が明らかにしておっしゃったんですけれども、それは同じように世界観の問題につながることを思います。

イギリス帝国が世界経済体制をコントロールしていたときは、帝国主義のさかりになっていました。その歴史は、マルクスが言うように、ざんこくな原始的資本集めの時代でした。そして同じように、勃興期に乗ったアメリカ人は、いわゆるアグリー・アメリカンとして相手の文化などを激しく搾取する場合もありましたけれども、イギリスほどひどくはなかったと思うし、むしろ相手の文化をばかにするような態度で、いろいろおかしいことを起こしたんですけれども、いまでは日本が同じような状態になっているかも知れません。国際的な反発を起こしている。しかしそれは、国内で正しく客観的に解釈しないと、問題がますます悪くなると思います。

一つの例としては、構造協議等いまの日米の貿易摩擦の例を取り上げてみたいのです。ペーパーの五節に飯田先生がお書きになったことを取り上げたいと思います。まず飯田先生がおっしゃったのは、前提としてはアメリカが日本に要求していることは無理（難題）だそうで

す。この構造協議では、特に流通制度を開く、市場開放は無理だそう  
です。どうして無理かを説明する前に、一つの非常に典型的な例を取  
り上げてその論戦のムードをつくったというんですけれども、その典  
型的な例はアメリカの政府高官が「日本の非関税障壁の最たるもの  
は日本人が日本語を話すことだ。言葉が一番の非関税障壁だ」と口を  
滑らせたことであると。極端な例と認めながら、非常にまじめに考  
えて、日本人が日本語を話すのをやめてアメリカ語を話すことを要求  
するのではないかと飯田先生は解釈なさったんです。

しかし、こういうような言葉をムツとなってまじめに考えることは  
極めて文化的な差の結果じゃないかと思っています。なぜかという  
と、アメリカ人は非常にジョークの感覚、そして皮肉なジョークの感覚が非  
常に発達しているし、おかしさの感覚は文化的に非常に発達していま  
す。それに対して日本文化は儒教的な背景で、アメリカに比べたらもっ  
と言葉をまじめに扱う文化だと思います。アメリカ人がこういう言葉  
を聞くと、この人は本気で言っているのではないことはよくわかるけ  
れども、日本ではまじめに解釈され、ますます誤解を起こすことになっ  
たと思います。

その上に立つて、アメリカが商慣習、要するに商業の習慣、流通制  
度を変えさせようとしていることも、同じように日本の文化を変える  
ことを要求していると飯田先生が解釈していらっしゃるんです。それが  
そうであるとしたら、無理難題だと先生がおっしゃることはよく分か  
ります。しかし、ふりかえて見れば、日本の商慣習はまるで一つの無  
形文化財みたいに考えていることになりアメリカの要求は日本の心を  
奪い取るようなことになっちゃうかのように見えるようになります。  
しかし実際に、日本の商慣習はそんなに深い文化的な財産でしょうか。  
かりにそうだとすれば、同じようにアメリカの自動車産業も一つの  
文化財だと言えるようになると思います。飯田先生がペーパーの三節  
に「日本がアメリカの自動車産業と家電産業を奪い取ったことは大き

なショックを与えた」と何か自慢げに、誇りに書いていらっしゃる。  
飯田 誇りじゃなくて客観的事実を言っただけです。

ブロードベント しかし、それはアメリカの文化にとって無理難題だ  
と言えないでしょうか。ようするに同じ論理の刀は二つのするどいや  
いばがあって、両方とも切れる。日本がそこまでの力を持っているこ  
とは、プライドを持っていることじゃないかと思っています。それは当然  
でちっとも悪いことでもないと思います。

しかし、もし日本の文化が商慣習を中心に置いていたとしたら、ア  
メリカ文化も車の文化とおっしゃったことで、どうしてアメリカ政府  
が自動車産業の日本化をそこまで許したでしょうか。あるいは、それ  
だけじゃなくて、コロンビア映画会社とか、ロックフェラー・センタ  
ーを奪い取られることを許したでしょうか。飯田先生がおっしゃった論  
理でうごけば、それをふせいだはずだと思いませんか。もし日本が流  
通制度の開放を断る権利があれば、アメリカも自動車産業をはじめコ  
ロンビア映画会社を奪い取られることを断る権利があるんじゃないで  
しょうか。それは非常に大事なポイントだと思います。両方の国がじっ  
さいに同じ原則でうごくことに合意出来ないと問題と摩擦が起ること  
は当然です。

そして、それは単なる偶然のことでしょうか。いやそうじゃなくて、  
第二次世界大戦の後でアメリカは世界大戦の悲劇を見て、それはこれ  
からどうしたら将来に防げるかと考えて、コーデル・ハル (Cordell  
Hull) という人物とかブレトン・ウッズ・アグリーメント (Bretton  
Woods Agreement) とかの会議で、やっぱり世界自由貿易体制と民  
主主義を全世界的に広げていくことが解決への道だと決めたのです。  
そして、第一次世界大戦の後みたいに負けた国を弾圧するよりも、成  
長させて行く方がいいと決めた。顔も立てるし、経済も立てるし、そ  
れによってお互いに協力できるような自由貿易体制をつくったら、世  
界大戦を防ぐ力になるんじゃないかと思って、非常に日本に優遇措置



をしてきたことはだれも否定出来ないと思います。

その証拠に、去年の八月の「文芸春秋」に島田晴雄先生が「土地と金融が日本をゆがめる」という論文を出されたんです。それに書かれているのは「かつての日本は、アメリカの技術援助や市場提供を十二分に吸収して成長してきた経緯があるし、日本は防衛費負担が少ない分だけ、ある意味でも得をしていたことは事実であるから、歴史的な意味でも、また現代的な意味でも相互に過度の貸し借りのない、平等なバランスをまじめに考える必要がある」。そう書いてあるんです。それをアメリカが意図的に提供したのに、もっと開放して、もっとそういう自由システムに参加することに、今になって文化的な理由で抵抗することは、日本人論みたいに文化的性質を具体化、固定化し過ぎることだと思えます。

本間 ありがとうございます。

皆さまのご発言を少しいただいて、まとめて飯田先生にお答えいただくということにしたいと思います。

リーダー 飯田先生のイギリス人論についてちょっと説明したいと思っています。

申し訳ございませんが、飯田先生はイギリスの文化を理解していられないのではないのでしょうか、イギリスの新しいものについてのお話は、ちょっとおかしいと思います。イギリス人がいつ新しいものの好きから嫌いになったかというのは、歴史の本には書いてありませんが、その理由は、昔からイギリス人に新しいものについての二つの面があったからだと思います。新しいものと、近代化の成長があっても新しいものに抵抗する伝統はイギリスで根強いです。

たとえば産業革命のときも、機械破壊主義運動、Luddite という運動があって、そのときからずっとイギリス人は、機械を使っても機械破壊主義

もちろん日本の国内生産制度は非常にうまくできていて非常にうまくいっている側面が強いけれども、それはおもに生産業です。流通業は違います。効率の低い制度を変えてほしいという外国からの訴えを文化だからとして否定するのは解決出来ない問題を起すことになると思います。

要するに貿易摩擦を文化的な差として解釈してしまうと、お互いにムツとしたりして、ますます問題は解決出来なくなる。

だからむしろ、それを乗り越えて、共通的な開放市場と民主主義の支持を一緒に強める必要がある。積極的にそういう体制を支持する必要があると思います。

一応それだけです。

を心の中に置いていると思います。その機械破壊主義運動は、軍隊や政府の手で抑圧されてしまったので、イギリスの急速な経済成長がシステムの抑圧とよく続いていると思います。イギリス人も必要があれば新しいものを使います。新しいものを使っても、機械などはあまり尊敬できないと思っています。

別の面で、日本のほうは機械に尊敬の念を持つと思いますが、たとえば日本人は自分の友だちと話すよりもパチンコ屋の機械を好む傾向があるでしょう。

イギリスの新しいものについての考え方は、イギリスはまだ使えるものを捨てたくないということでしょう。たとえば、使えるものは捨てなくてずっと使うと思います。日本のほうは、捨てる文化みたいだと思いますね。そういえばこの時代は環境公害の時代で、資源が消滅する時代でしょう。資源がだんだんなくなる。こういう捨てるような文化は、捨てたくない、捨てないような文化と比べると、どっちがモダン、どっちが本当に基本



的に将来的な文明かという質問をしたいと思います。

エセンベル 飯田先生のおっしゃる機敏さと愚直さの比較的な変化ですね。前にはイギリス人とアメリカ人にあっただれどもいま日本人にあるということ、実はそうじゃなくて、歴史的に工業化の歴史は基本的に科学と技術の革命と言って、簡単ですけれども悪くないと思います。

イギリスのことは残念ながら詳しく知りませんが、ちょっとアメリカのことを引用していけば、アメリカでは機敏さと愚直さが死んでいるんじゃないかと、ほかのフィールドに行っているんです。車をつくるのは古いテクノロジーになりますから。車をつくる、飛行機をつくる、毎日の生活のために物づくり、工業化のマネジメントでも、テクノロジーでも、歴史的には十九世紀からきて、進歩して、二十世紀に続けたテクノロジーでありまして、歴史的に二十一世紀に続くかもしれない。続かないかもしれない。新しいテクノロジーが出てくるかもしれない。たとえばアメリカのスペース・テクノロジーの社会に入れば、結構機敏そうな人たちが多いですよ。おもちゃみたいにサテライトをついたり、ベニスとかそういうところに行ったり、私たち普通の人間のわからないことばかりを習ったり、こういう知識があるのかと私たちみたいな普通の人間がいまのところわからないけれども、二十一世紀にはこの機敏さの結果を我々世界が必ず感じるといふふうに、私はいま感じているんです。

アメリカという社会のテクノロジーとサイエンスは、シフトしている。いま新しいフィールドに入って、そういう人物もそこに集めていると思うんですよ。実は、そこにあるのは落ちることじゃなくて、変化ですね。シフトだと思います。それが大事だと思います。

二番目のことは言葉の問題です。アメリカでは日本語が障害ですから、アメリカ語を使ったらどうですかというふうな冗談を言われたら、本当にびっくりするでしょうね。私にだれかが「あなた、もうトルコ語を話すのをやめて。話すのは難しいですから英語を使いましょう」と言ったら、おかしいと思うでしょう。ただ一つの問題点は、特にマネジメントと経済の

国際化の面にあります。たとえば私はトルコ育ちの人です。(トルコには)アメリカの会社もきて、イギリスの会社もきて、いろいろなんですよ。フランスの会社もきてるし。確かにその言葉(外国語)を、地元の人は使っているんです。便利ですものね。フランス語が上手な人をフランスの会社で使うのは便利ですから、できるだけ自分でもトルコ語を習っている人を派遣しているかもしれないけれども、地元ではその言葉をわかってマネジメントに参加できる人を割合使っているんですよ。

しかしこのごろの、日本の会社は、ほかの国ではどういう状況が起っているかわからないけれども、(トルコでは)日本語の達者な人をあまりほしくないんですよ。実は日本の会社で日本語の達者な人をちょっと恐れているみたい。そこには国際経済に対しての日本人の文化差があると思うんですよ。日本語が達者すぎる人を、あんまり会社に入れちゃうと問題になる。これは経済関係にとっては、何か考えなくちゃならない問題だと思います。

以上です。

べフ 飯田先生は冒頭に、題には文化という字が入っているけれども文化のことはわからないから経済だけにしぼってお話をなさるというふうにおっしゃったんですが、それは、ここは日文研で文化の研究をするところですので、ちょっと困るんじゃないかと思うんですが(笑)。

飯田 謙遜して言ったわけですよ(笑)。

べフ ところが、私が言いたいのは、やはり文化のことをおっしゃっているというところなんです。一つ端的な例を取りますと、どうして日本が最近の高度経済成長に成功したかという例で、単なる例にすぎないんですよ。食堂のことをおっしゃって、みんな上役も下役も全部一緒のところ食べる。制服もみんな同じナッパ服を着るということをおっしゃったわけですね。

ところが、飯田先生は平等主義というものを導入したとおっしゃったんですが、実は平等主義ではないわけですね。みんな給料も違うし、役職も

違う。権利も違う。ところが平等主義のようなものをもってきて、つまりナッパ服とかを導入することによって、ヒラの者たちが働きがいを見つけてきたら、それはヒラの者をだましたことになるわけです。というのは、平等は見せかけの平等にすぎないわけです。ナッパ服も食堂も、それは文化の象徴なんです。象徴というのはそういう役割を果たすんです。まさにそこには文化というものが入ってきている。それは避けられないことだと思うんです。

そのときに飯田先生は、ここに日本的経営論というようなものになってきただけでも、私はそういう表現は避けたいというようなことをおっしゃったんですが、表現はどうであれ、そういう日本の要素が入っている。日本珍獣論というものがそこに入らざるを得ないと思うのですが、それはかまわないと思うのです。というのは、珍獣であるのは日本だけではなくて、欧米も珍獣なんです。みんな珍獣なんです。それを、この間マツキーン先生がおっしゃったように、説明していくことができるわけです。欧米は普通で日本が珍獣だという見方は困るわけです。そういう意味で、私は一つ一つの珍獣を説明していくというのが我々の役目ではないかというのを申し上げたいのです。

本間 ありがとうございます。

構造協議というのは、欧米は普通で日本は珍獣だという話だという説を唱えている人もあるかもしれないんですが、濱口さん、どうぞ。

濱口 いまのベフ先生のお話と関連すると思うんですが、今日の発表者、コメンテーターの二人とも、文化的要因による説明を意図的に回避しているところがあるわけです。しかし、いまの日米構造協議にしてみても、日本語では協議ですけれども、英語で言えばストラクチュアル・インペディメンツ・イニシアティブという表現が使われているわけで、内容的にずいぶんニュアンスが違うわけです。そういう会議の名称一つにしてみても、そこに歴然と文化差があるわけですね。その点を無視することはできない。

非関税障壁というのも、ノンタリフ・バリアーと英語で表現しておりませんが、そういうノンタリフという表現それ自身が、アメリカ側から出されてきたカルチャー・バウンダーなコンセプトであるわけです。そこにも文化というものを回避することができない状況があらわれていると思うのです。

結局、異なる文化を持つ者どうしが経済的な摩擦をいかに解決していくか、ということに関しては、文化が互いに違うんだというだけでは解決にはならないのです。そこで、ヴァン・ドゥ・ワラ先生が指摘になったように、日本のルールが外向けと内向けとではずいぶん違うんだという、そういう二重性を前提にして、お互いに食い違いをながめ直していく以外にしょうがないと思うんです。

そういう意味で、ベフ先生の先ほどのご発言をサポートする形で、あえて文化差というものをみつめていこうじゃないか、と提案したいと思います。

クラハト 私は、経済のことは全然わかりませんから、どうぞ予め私の言うことを許してください。

私がびっくりしましたのは、先生の結論です。結論のところで、蛇足ですということですね。亡霊ですか、国宝ですか。マルクスの話になるんですが「あるいは日本はマルクスの理想を最もよく実現した国なのではないか」ということが座談のジョークとしてときどき言われる。しかし考えてみれば、それは必ずしもジョークではなく、もっとまじめな話なのではないだろうか。

戦前のドイツの話なのですが、こういう違いがありました。一つは、シャツフェンデス・カピタルということでした。シャツフェンデス・カピタルは価値を創造する、ゲルマン民族の資本ですね。そして、ラッフィンデス・カピタルは、搾取するユダヤ人の資本ですね。そういう区別は、資本と労働の矛盾を無視するための区分でした。戦前の日本のことを見ますと、ご存じのとおりよく家族国家こそ共産主義の段階を実現した

国家と同じことですね。家族国家こそマルクス主義の理想を一番よく実現した段階です。そういうことは、丸山真男氏が上手に指摘したんじゃないんですか。一如の世界という言葉では「色即是空、空即是色」。

そういう意味では、先生のいま言うことは、経済学の新しい密教学へのアプローチにならないんですか。経済学の素人の話ですが。

笠谷 私議論は、ベフ先生とか濱口先生の議論の延長線上になるわけでありませうけれども、文化的要因と言うよりはむしろ歴史的アプローチということについて、私は言いたいわけです。最近の日本の経営というのがまったく新しい、飯田先生の言によれば戦後、ごく最近できあがったものというものであったわけでありませうけれども、マッキン先生のときに私が申しましたように、適応性という観点から考えるならば、歴史的要因は無視することはできないだろうということをもう一回言いたいと思います。

もう一つの問題は、歴史的なところの問題が、今日の新しいシステムを考える場合、分析の要因として阻却されるべきでない。それは珍獣論的な意味で、あるいは日本人の卓越性の意味で無視すべきということではなくして、もっと効果的にそういう観点を利用していいのではないだろうかということです。

一例をあげてみますならば、新しい日本の経営のシステムの中に提案制というものがあるわけですね。先ほども飯田先生がおっしゃいましたけれども、現場の労働者から一つ一つの改善意見をあげる。いわゆる提案制でありますけれども、これが江戸時代の官僚制度の中で開発されてきました稟議制度の伝統の中においてとらえるべきではないかと思えます。そうしますと、提案制ということの意味を歴史時代における江戸時代においてなぜ稟議制が開発されてきたのかということの意味との関連において新しいシステムの中での意味が考えられるんじゃないかと思えます。

なぜ江戸時代の官僚制度の中において稟議制度が発達してきたかということは、私の見解によりますならば、江戸時代において議會制度が欠如していたことの代替物ではないかという一つの仮説を持っております。これ

はあくまで一つの仮説でありますけれども、そういう観点から、たとえば今日の企業経営内部における提案制度の持っていることの意味を考えてみてはどうでしょうか。そういう形において歴史的アプローチは阻却されるべきじゃないし、それなりの意味を持つんじゃないかということを申し上げます。

もう一つは、飯田先生の論文の中に、日本人は新しいもの好きである。あるいはまた、勤勉である。一貫してそうであるなどというようなことは言わないほうがいいとおっしゃっております。私も、確かにそうだと思います。そういうことを言うのは非常に傲慢な話であります。しかしながら、そうではなかったと言うのは、事実認識の問題でありますから、たとえば江戸時代の方、日本人が新しいもの好きで、勤勉でなかったとは、私は事実問題でそれを言うのはおかしいのではないかと考えております。言わないほうがいいというのはそのとおりだと思いますけれども、事実としてそうではないというのは、これは事実問題でありますから、また別のことではないかと思えます。そこらへんのことを、ちゃんと申したいと思えます。

本間 ありがとうございます。

それでは、飯田先生にまともにお答えいただくことにいたします。

飯田 たいへん厳しいコメントをいくつかいただいて、ありがとうございます。

まずブロードベントさんのコメントなんですが、結局私は同じことを言っているのではないかと思うのです。たとえば日米構造協議でアメリカが言っていることは無理難題だというのは、文化差があればやっぱり無理難題なんです。商慣習が長年できあがってきているものをすぐに変えろというのがアメリカの要求ですよ。私は、それは簡単じゃないだろうと思うし、ここには書かなかったけれども、それを变えても、たとえば日米の貿易不均衡、つまりアメリカの対日貿易赤字、日本の対米貿易黒字が顕著に減るものではないかということはみんなが言っている。これはほとんどコンセン

サスだろうと思う。しかし、それにもかかわらず、やっぱり私は、アメリカとの友好関係は日本にとって非常に大事であるから、日本として真剣に対応しなければいけないと考えます。「それなりに」と書いたのはちょっとまずかったのかな。対応すべきだという考え方であります。

日本人が日本語を話すのが最大の非関税障壁というのは、実はボルドリッジというかつて商務長官をやった人の発言ですが、私はそのコンテキストを、現場にいたわけではないから知らないですけれども、ジョークではなかったというふうには自分では解釈しています。もしジョークだとしても、おっしゃったように、日本人はジョークの文化でなくて割とくそまじめ文化だったら、そのことを考えてボルドリッジ氏は発言すべきではなかったのかなというのが私のコメントです。やはりアメリカは、ずっと世界一を続けてきて、いまでもいろんな面で世界一の国ですから、どうしても、率直に言って傲慢になるということはしばしば起こるということもまた事実だろうということを申し上げたい。

リーダー先生の、イギリスにも新しい伝統に反対する要素があったというご指摘はラッダイトのことですね。これはどこでもあるわけです。しかしやっぱり産業革命をやったということは、その前にエンクロージャーなんかもあったわけです。このシンポジウムのどこかのセッションで、日本の近代化は早すぎたという話が出たけれども、私はイギリスの近代化とかイギリスの産業革命だって本当に早かったんじゃないかと思えます。だったら、いろんな反対運動が起こっても何ら不思議ではないし、そのことは私の議論とあまり矛盾しないのではないかな。

日本人のパチンコ信仰。日本にはパチンコがあるけれども、どこの国にもああいふものはあるので、私はどうもイギリスの方は、珍獣論がやや多すぎるのではないかという印象を、かなり前から持っているんですね。人間は友だちと話したいこともあるけれども、パチンコの前で孤独になりたいこともある。イギリスにパチンコがないとしたら、イギリス人は何かほかのことでやっているんだろう。あんまり日本はパチンコが好きだから機

械信仰だというのは、やや珍獣論で、私は感心しない。

捨てる文化の問題が特にこれから大問題だということは、おっしゃるとおりだと思います。

エセンベルさんのおっしゃった第一点は、アメリカは古いテクノロジーに関心を失っただけで、新しいものは依然として変わっていないとおっしゃったのですが、その議論が非常に多くあることは充分承知しています。つまり、物をつくることはもう時代遅れで、これからはソフトの時代だという議論がものすごくはやってたわけです。ですけれども、おそらくいまアメリカでそういうことに対する反省が起こっていると思います。アメリカで言うよりは、アメリカだっていろんな議論があるのですけれども、たとえばMITのチームが「メイド・イン・アメリカ」という非常に大きな本を出して、物をつくるのが時代遅れだという考え方に対する反省が起こっているのですね。そのことを申し上げたいと思います。

日本語を話す人を日系の企業が受け入れないというのは、やっぱり秘密を聞かれると困るからでしょうかね。私は、インドネシアで一年、インドネシア政府のアドバイザーみたいな仕事をやっただけです。そこで私が思ったのは、その当時から日系の企業はあつたんですけれども、日系企業では日本人がインドネシア語を話す努力を非常にしていたということは事実で、それはおそらくアメリカ人とかドイツ人よりは日本人のほうがそういう努力はしているんじゃないかと思えますね。いまでもそうだと思います。これはやはり、日本は新興国でして、たとえば英語でしたら二百年ぐらい国際語ですから、どこの国の人でも英語を話すだろうという期待、あるいは英語を話す人がかなりいるだろうという期待はあるわけですね。日本人は、残念ながらそういう期待はできないわけで、だったらその国の言葉を話そうかという努力になるという面があるということは言えるんじゃないかと思っています。

ベフさんの、食堂とか制服が見せかけの平等だという議論は昔からずっとありまして、非常にインテリ好みの議論であります。私は、日本の平等



主義にイデオロギーの部分が含まれていることは明らかだと思うけれども、そういうこともあって、私は特に食堂と制服のことは注釈を前につけてから申し上げました。「いまでは言われすぎたから言いたくないけれども」という言い方で申し上げます。

そうかといって平等主義ではないという言い方は違うのでありまして、つまり企業の中で賃金格差があるのは当然のことなんですよね。まったく平等に賃金を払うのは、よほどラジカルな共産主義のコミュニケーションの話だけであって、現実には必ず差はある。その差が小さいということが、顕著に小さいということが大事なことでないかということを、私は申し上げた。その部分については、やはり平等主義は見せかけではなくて本物だろうというふうに考えております。

アメリカ人もヨーロッパ人も珍獣だということは、私がまさに言いたかったことでありまして、私と同じことをおっしゃった。つまり、どの国の国民も変わっているわけで、それと同じ意味で日本人も変わっているだけです。日本人だけがとくに変わっているわけではないということが、日本人論では往々にして忘れられるということを申し上げたいだけです。

濱口さんの文化的説明を回避しているというご指摘は、私は回避してはいないんですけれども、文化主義ということで非常にばかな要因を出してきて説明するのを回避というか、拒否するわけです。私は年功序列制などというのは、はじめに申し上げたように、まったくの自分でつくりあげた幻の議論だと思えます。そういう議論がまだほかに日本人論の中にいくつかあるなということだけです。回避はしております。していないつもりです。

クラハトさんがおっしゃった密教学というのは、私はそんな大それた気持ちは全然ないということです。

笠谷さんの歴史的アプローチの話ですね。これは実は私、ものすごく気になっているわけです。いまの日本の企業の慣行になっていることが一体いつからはじまったかといいますと、一番近いのは第二次大戦後で、アメ

リカン・デモクラシーを一生懸命勉強して、先生以上に一生懸命やったという面があったんですが、どんなさかのぼっていくことはできるんですね。山本七平さんの「日本人とはなにか」という本が最近出ましたが、(笠谷さんの本も引用されていますけれども)それによると全部昔からあったことになるんですね。私は、歴史的な側面はものすごく大事だとは思っていますが、それをあまりやりすぎると全部昔からあったことになりまして、たとえば山本七平さんのは、室町時代ぐらいからエコノミック・アニマルだったとか、すごいんですね。そのつもりになって捜せば、そういう要素があることは事実ですよ。

おそらく歴史的説明をどこまで重視し、どこで打ち切るかということが自分でわからないだけに、困っているわけです。

笠谷 決定論的にそれを考えるのに、そもそもあいまいがあるように思えるんですね。どうすれば機能的に使えるかという問題ではないかと思えますね。決定論が要するによろしくないというふうに考えられます。

飯田 確かに江戸時代における稟議制というのも非常に大事で、おそらくみんなの意見を聞いてコンセンサスをつくらうとする。その場合にできるだけ広い範囲の人の意見を聞こうというのは、日本の伝統としてあったような気が、非常に強くするんですね。ですけれども、やっぱり同時に第二次大戦後の変化というのは非常に大きかったんじゃないかと思えます。たとえば、農地改革で日本の社会は非常に大きく変わったと思うんですね。私の家は地主ですから被害を受けて没落した側なんです、それにもかかわらずたいへんいいことをやったと思う。アジアの国々、あるいは一般に南の国々の発展のことを議論するときに、農地改革をやっているかやってないかということは、非常に重要な論点ですね。そのことをみんなが議論しているんですが、そういう意味では戦後の変化はずいぶん大きかったんじゃないかと思えます。

お答えになったでしょうか。

本間 どうもありがとうございます。



もう一回りやり直したいような非常に活発な議論が出たと思います。飯田先生は一種のアンチ・インテレクチュアル・インテレクチュアルでありまして、資料の批判をやりながら日本経済を論じてこられた。ものごとを斜めに見るというのは成熟期の象徴だそうで、（飯田先生がそう書いていらっしやいますが、）飯田先生のほうが先に成熟しているんじゃないかという感じもするんですけど、私は飯田先生の論文の中では経済と人間のパラドックスというところがおそらく飯田哲学の根本なんじゃないかと思っています。あそこが非常に大事で、トレード・オフとらえているところを、我々もうちょっと考える必要があるんじゃないか。そして、経済の側に立つか人間の側に立つかというような議論かずと日本でなされてきている。あえて経済、経済成長、そこから考えていきたいと思います。うのが飯田さんのアプローチであって、それはしかし平等主義というものを前提していまして、平等主義は人間主義に置き換えられるということがあります。そうすると経済と人間のパラドックスというのはどういうふうな、そこでまた考え直すかという問題があって、飯田先生はそれを日本の経済成長を見つめながら考えておられるのではないかという気が、昔からしております。そういう点について、さらに時間差を入れた問題として、文化差よりは歴史発展の段階差ということを今日は強調されて議論されたんじゃないかという気がいたします。

まことに残念ながら、もう時間が過ぎておりますので、ほかのご意見はすべて総括のところに回すということにいたしまして、本日の午前のセッションをこれで終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。